

飯野正子、竹中豊（総監修）／日本カナダ学会（編）
『現代カナダを知るための60章（第2版）』
明石書店、「エリア・スタディーズ叢書」、2021年

IINO Masako, TAKENAKA Yutaka et JACS (dir.)
60 chapitres pour connaître le Canada contemporain (2^e édition)
Akashi-shoten, coll. « Area Studies », 2021.

村石麻子
MURAISHI Asako

本書は2010年に刊行された『現代カナダを知るための57章』の第2版であり、時代の変化とともに情報をアップデートする目的で改訂に至ったものだ。地域研究において、正しい現状認識に基づき、諸問題に具体的な方策を示唆することは、最たる学究目的のひとつと考えられるが、その意味でも国内外の最新情報に即した改訂版は、大変意義深い。例を挙げれば、2016年米国トランプ前大統領当選に続く保護主義政策によりカナダが受けた経済的打撃、また2020年未曾有のコロナ禍におけるアジア系住民へのヘイトクライムや「カナダ多文化主義の日」イベントのオンライン開催などにもふれており、カナダの近年の動向も視野に入れている。

また本書は「エリア・スタディーズ」シリーズの1冊であり、主に大学生を対象にした教育的配慮のある概説入門書である。とはいえ執筆陣が日本カナダ学会創立に寄与した飯野正子・竹中豊を初めとしたカナダ研究の最先端に通暁した研究者であることから、一歩進んだ学びを提供してくれている。

そして本書は何より、アメリカ主導のグローバリゼーションの流れの中で、今後カナダについて知見を深めることの意義をわれわれに示唆してくれる。カナダという国は、北米大陸にあり米国の影響下にありながら、米国とは趣を異にする国である。アメリカに比べて犯罪率や乳児死亡率が低く、失業保険や健康保険など社会保障制度が充実している。貧しい州への地域開発支援も行き届いている。飯野正子は、こうしたカナダの「寛容さ」が、アメリカのイーグルに対しカナダはビーバーをシンボルとすることに象徴されているとし、「現在も、アメリカ人との違いがカナダ人のアイデンティティを確固としたものにする傾向は変わっていない」（73頁）と述べている。

またアメリカと同じ多民族国家でありながら、その原理は根本的に異なる。対立が起こった場合、一方が他方を同化吸収することで統合するのがアメリカだとすると、カナダは異分子が雑多に混在する状態をあるがまま受容する。竹中豊の言を借りれば、『異なること』に価値が置かれ、それが積極的に評価され、画一化・同質化を目指さない(367頁)のがカナダなのだ。本書でも「多様性の中の統一」と称された第2章で、移民問題や言語政策、英仏2か国語による国歌など、多文化主義関連のトピックが扱われている。カナダは、トランプ前大統領の差別的発言をよそに、また極右政党の台頭という近年ヨーロッパで顕著なポピュリズムをも断固退け、今日も自らの多文化主義政治を貫いている。このように米国のみならず欧州諸国も難儀する状況下「カナダ的例外」が可能だったのは、1988年世界初の「多文化主義法」が施行されたからだ。国家理念が法制化されたことで実効力が増したというのが、本書識者による統一見解である。

また宗主国イギリスとの関係性を見てみても、アメリカとの違いが際立つ。岡田健太郎の言を拝借すれば、カナダは「アメリカを反面教師として国づくりをしてきた」(192頁)のであり、アメリカがイギリスとの激しい抗争を経て独立を勝ち取ってきたのに対し、カナダは今もなおイギリスの立憲君主制に範を取り、国王を主権とする政体を維持している。

ヨーロッパ文化受容においても、アメリカ開拓民が旧文化との断絶を目指したのに対し、カナダには宗主国の「派生文化」「継承文化」として伝統を忠実に受け継ぐ姿勢が根っこにある。しかしその一方で旧大陸の遺産から解き放たれ、新しい文化を鑄直そうとする創造のエネルギーも持ち合わせている。真田桂子が述べているように、「苦難の歴史をくぐり抜け、言語やアイデンティティの問題を鋭く問いかけながらダイナミックに変容し、グローバル化の時代に新たな普遍性を獲得している」(326頁)のがフランス語系カナダ文学であり、それは英語系カナダ文学にも通じるものだ。

そしてカナダの特色は何より、フランス語圏ケベックの存在によって、アメリカ以上にフランス文化に重きを置いていることである。本書でもその点について社会的・政治的・教育的・言語的視点から、ケベックのナショナリズムやカナダの英仏バイリンガル教育など様々なトピックを扱っている。国際言語としての英語汎用化の流れの中で、フランス語のみを公用語と定めたケベックの「フランス語憲章」は、アメリカの英語覇権に一石を投じる大胆な言語政策だと言えよう。丹羽卓によれば、「北米の『英語の海』のなかでフ

ランス語を死守する」(150頁)ケベック人にとってフランス語は、フランスとの絆ではなく「ケベックの人々をつなぐ絆」であり、「フランス人の垂流」でないケベック人としての矜持だと言う。ケベック人が独自の存在感を放つカナダは、多言語主義においても一歩進んだ次元にいることがわかる。

矢頭典枝がケベックを称して「カナダ内政を揺さぶってきた国家のアキレス踵」(206頁)と言うように、こうした半ば独立国家に近い強固なアイデンティティを持つケベックをも内包するカナダは、世界においてもまれに見る懐の深い先進国ではないだろうか。作家マーガレット・アトウッドがカナダのレズン・デートルは「サバイバル」にあるとしたが、今後カナダについての知見を深めることは、この混迷する世界で各国がまさに「生き残り」をかけて今後の指針を見定める上で有益であり、その意味でも本書は意義深い。

また本書は、日本においてカナダについて学ぶことの意義も再認識させてくれる。アメリカ大陸の開拓精神を受け継いでいながら、アメリカ以上に多文化主義を先鋭化させ、多民族の平和的共存に成功しているカナダは、和を尊ぶ日本の在り方につながるものがあるのかもしれない。しかし日本の和は、ともすれば同調圧力に屈した不本意な結果であることも少なくない。それが単一民族性の色濃い国民性に起因するのかは議論を要するところだが、差異の認識と個人の尊重が発点になく、問題の抜本的な解決ではなく対立・衝突の回避のみが至上目的になってしまっていることが往々にしてある。今後積極的な移民受け入れも視野に入れ、真に鍛え上げられた共同体を実現するためにも、日本でカナダ研究を深める意味は大きいだろう。

現に本書では、日系カナダ人と日本文化について1章が割かれており、日本的な精神風土に生まれながら、多文化共生という世界の潮流に望むと望まざるとにかかわらず身を投じた先達の知恵をそこに探ることができる。しかし今では一口に日系コミュニティーと言ってもその内実は多様で、このように入植時代から続く差別により一度は否定した自らの日本人性を回復するという複雑なプロセスを経た戦前・戦中世代がいる一方、日本人よりむしろアジア人としての意識が強い戦後世代もいる。戦争体験の有無による歴史認識とアイデンティティの相克を乗り越えんとする日系カナダ人同士の共生の努力もそこに垣間見ることができる。

またカナダにおける日本の伝統文化の隆盛についても言及されており、カナダでの幼少期を経験した矢頭に至っては、武道や茶道などの日本文化普及における両親の活躍ぶりを紹介している。フィールドワークが地域研究の

根幹を成し、本書が各研究者による緻密な実地調査の賜物であることは言うまでもないが、さらに本書では矢頭のように現地に生まれ育ちそのメンタリティを肌身で体得した研究者も執筆者として名を連ねており、より充実した内容になっている。

このように本書は、カナダ研究の重要性を示唆しつつ、地理・政治・外交・経済・社会保障制度からジェンダー・女性の社会進出、教育・言語から文化・文学まで幅広くカバーし、全体像が把握できるように工夫されている。

歴史については、現代社会の諸相をコンパクトに俯瞰するため歴史的記述は最小限に留めたとあるが、イヌイットなど先住民について1章割かれており、現代カナダの多文化社会が、建国当初から先住民との共生を模索してきたことが覗える。そして本章は何より、理想の国カナダ礼賛に終始することなく、その道のりが決して安寧なものではなかったことを強調している。先住民はヨーロッパ人入植の過程で、キリスト教への改宗、近代的生活様式へのシフト、低い就学率改善の名目での寄宿制度の強制的導入、教育の名の下で正当化された民族的アイデンティティ剥奪など、多くの犠牲を強いられた。双方からの歩み寄りというより、支配と被支配の関係において繰り返されてきた暴力というカナダ史の暗部を、本書は抉り出している。

その意味でも白井澄子による『赤毛のアン』についての記述は興味深かった。子供の頃親しんだこの児童文学の金字塔は、少女が大自然の恵みの中でコンプレックスを克服して大人へと成長してゆく牧歌的なビルディングスロマンという位置付けだった。ところが実のところ作家モンゴメリは、風光明媚なだけでないアヴォンリーの厳しい自然と極寒の冬、そして何より保守的な地方の白人社会における先住民差別問題は、みて見ぬふりをした。カナダという理想郷に描かれなかった現実にメスを入れる、いわば痛みを伴う再読の試みが行われている。

こうした多角的・複眼的な視点で書かれた本書に、強いて附言するなら、次の2点を挙げたい。

まず移民問題である。先住民との共生については先述のように負の部分の記述が見られる一方、移民受け入れの歴史においては、成功例としてのカナダに対する肯定的な論調が主で、もっと具体的にどのような闘争の歴史を経て、多文化主義実現に至ったのか知りたいと思った。

また本書は、カナダの移民政策の成功が「経済的観点からの移民選別」に因るとの共通見解を示しているが、この世界規模の問題が抱える多くのジレ

ンマを看過してしまっていないか。以前カナダは、同化統合を容易にするべく欧州の白人キリスト教移民を積極的に受け入れていたのが、時代のニーズに応え、人種・民族・宗教を問わず能力・技能を備えた人材で、かつ国の言語・文化・慣習に倣い同化の意思があれば受け入れるという姿勢に変化していった。こうした視点は、確かに人種差別問題は解決できるのかもしれないが、別の差別問題を無視していることにならないだろうか。能力別の受け入れは、換言すれば「優良・優秀」な移民のみを受け入れるということであり、就労機会の平等や居住の自由といった基本的人権は加味されていない。そもそも先進国における移民受け入れは、少子高齢化社会における人口政策、労働人口確保の政策の一環として行われてきたが、無制限に認めるわけにもいかず当然選別を迫られる。その際どんな基準に依拠するのか。アメリカの抽選による永住権獲得のように偶然性に委ねてよいのか。またフランスではサルコジ政権下、不法滞在者の本国への強制送還など強硬政策が取られ、家族を呼び寄せることで増幅する移民人口に対して、受入国側による「選ばれた移民 (immigration choisie)」ならぬ、「被った移民 (immigration subie)」問題が喧しく取り沙汰された。この難題にカナダは現時点でどう応え、今後どう応えていくのか。

次に移民問題と密接に関係する宗教の問いである。アメリカの9・11に続きフランスのシャルリー・エブド事件と近年相次いでイスラム過激派によるテロ事件が起り、イスラム教との共生は、世界の主要先進諸国にとって喫緊の課題となった。ケベックについては飯笹佐代子が言及しており、ヴェール規制強化の経緯を述べた上で、「静かな革命」を経験した世代にとりわけ反ムスリム感情が強いと指摘している。政教分離政策の流れの中で自らの信仰の否定、カトリックの伝統との断絶を強いられた60年代を生きた人々にとって、ヴェール認可が公平を欠くと感じられるのはごく自然だろう。カナダはこうしたケベックの非寛容とも言いうる対応に難色を示したようだが、カナダ全体での宗教政策、とりわけイスラム教との関係性はどうなっているのだろうか。さらなる考察が待たれるところである。

(むらいし あさこ 福岡大学)